

# 古文書を読む会学習記録

作成日 2019年7月27日

開催日	2019年7月25日	時 間	10:00~12:00
場 所	区民活動センター会議室	出席人数	14名
講 師	真田 雅行氏	作成者	松本 和俊
テーマ	第二学習 北槎聞略（大黒屋光太夫漂流記）③		
概要	<p>難破船が漂着した島の様子（つづき）</p> <p>磯吉ら5人は、2人、3人に分けられてロシア人に連れて行かれ、どうなることかと心配するが、特に危害は加えられない。磯吉の所に老人が来てタバコを吸っている時に20~30人の者が来る。その様は、極めて異形で、頭はカムロで、顔にはすじ(刺青?)があり、鼻の孔と下唇に角が生えているので、磯吉は殺されるのではないかと怖れ、心中で大神宮に祈っているうちにこれらの者は帰っていった。これは、この島の女たちで、漂流人を見に来たとのことであった。この老人は、カムチャツカの土人であるが、本国に教化して本国人となり、磯吉たちの世話をしてくれた。</p> <p>光太夫の所にラシャを着た4、5人の者が来る。かしらは、ニビヂモフといい、本国の大商人の手代で、皮類の交易のために、この地にきているものである。</p> <p>光太夫らが乗ってきた船は、暗礁に触れて、船底を破損し、上部のみ磯際に打ち寄せていた。荷物も残らず流されていた。</p> <p>夕方、ニビヂモフ等が、船内から酒1樽を見つけてきて飲み交わし、酔って踊ったり歌ったりしていた。島人等もこれを見て船内を探し、1樽を持ち出して来て飲んだが、吐き出してしまった。</p> <p>これは、風浪の烈しいときに舷(ふなはた)に出て小便することは出来ないので、空き樽にて用をたしたものを酒と間違えて飲んだものであった。</p> <p>住むところは、冬に備えて魚、雁、鴨などを乾かして保存する所であったため、臭気がひどく、匂い袋を火にいれてしのいだ。</p> <p>ニビヂモフ等は、政府に税金を納めてラッコ、アザラシ、トドなどを島人に獲らせ、本国へ送ることを仕事としている。5年毎に本国より迎えの船が来て交代する。迎えの船が来れば光太夫たちも乗せてもらえるだろうと期待するが、なかなか来ない。そのうち仲間のうちに次々に死者がでるようになる。ひたすら迎えの船が来るのを待つが、一向に来ない。言葉も次第に分かるようになり、いたずらに手をこまねいても仕方がないので、島人の手伝いをして糊口をしのご。</p> <p>3年後にロシア本国から迎えの船が来るが、風浪烈しく接岸できず、破船する。やっと来た迎えの船が破損したので、一同大いに失望する。</p>		
予定	2019年8月8日 10:00~12:00 於:区民活動センター会議室 第一学習 磯子村中浜 安室忠治家文書 ①		